

朝日新聞

「私のがん対策」

《患者を支える人々》

- 09/11/17 皮膚・排泄ケア認定看護師 祖父江 正代(そぶえ・まさよ)さん
- 09/10/20 臨床研究コーディネーター 山際 有美子(やまぎわ・ゆみこ)さん
- 09/09/24 診療情報管理士 稲垣時子(いながき・ときこ)さん
- 09/08/18 臨床工学技士 近藤敏哉(こんどう・としや)さん
- 09/07/24 管理栄養士 稲野利美さん
- 09/06/16 言語聴覚士 安藤牧子さん
- 09/05/19 作業療法士 田辺瑤子(たなべ・ようこ)さん
- 09/04/21 診療放射線技師・富樫聖子(とがし・せいこ)さん
- 09/03/17 がん薬物療法認定薬剤師・伊東俊雅さん
- 09/02/17 ソーシャルワーカー・佐原まち子さん
- 09/01/28 がん看護専門看護師・



97年、WOC看護（現皮膚・排泄ケア認定看護師資格）を取得。07年に名古屋大学大学院医学系研究科（看護学専攻）博士前期課程修了。同年から現職。08年にがん看護専門看護師資格取得。共著「がん患者の褥瘡（じよくそう）ケア」（日本看護協会出版会）がある。

患者を支える人々

皮膚・排泄ケア認定看護師

祖父江 正代さん

① ストーマ保有者の日常生活サポート

② 食事や入浴・服装・趣味も一緒に考える

愛知県江南市のJ.A.愛知厚生連江南厚生病院には、皮膚・排泄ケア認定看護師が8人いる。

ケアやサポートの対象は次のような人たちだ。大腸（肛門を含む）、膀胱、子宮などにがんができてストーマ（人工肛門・人工膀胱）を造った人△がんによって皮膚症状がある△入院中や退院後に床ずれや皮膚のかぶれ、むくみなどができた△糖尿病の合併症で足の皮膚に症状がある人。

祖父江正代さん(39)は皮膚・排泄ケア認定看護師の一人。ストーマの場合に言えば、手術前後の説明から造設位置の相談と決定、定期的なサポートと皮膚のトラブルなどのケア、日常生活の悩みや不安の支援、社会福祉に関する情報提供などを担当する。

ストーマ保有者でも生活上の制限はない。祖父江さんは、これまでの生活をできるだけ続けられるように、「嫌れない。におわない」「皮膚がかぶれない」「ケアしやすい」ための知識や技術を患者に教える。排泄だけでなく、食事や入浴にはじまり、服装や趣味、性生活に至るまで一緒に考える。紹介状があれば、退院までなくとも相談にのる。

岐阜市に住む男性(41)は直腸がんでもう一度手術をし、ストーマを

造つて5年。「最初は不安ばかりだった。外来で祖父江さんと話をするたびに情報や励ましの言葉ももらい、生きていく安心感を得た。専門知識を持つ看護師がいない病院に通う友人は外出もできず、人にも会えない状態だ」と言う。

祖父江さんはキャリア12年目。ストーマを見れば「いつもどのようになっているか」「皮膚トラブルがあると思病に何が起きているか」わかるようになった。

床ずれも、患者が「いつもどんな姿勢で寝ているか」「どの方向に体を動かすか」「どのようケアを受けているか」などが想像できるという。「床ずれの治癒は薬より看護や介護の力が大きい」と言う。

認定看護師の資格取得のきっかけは、専門知識を持つ先輩に相談すると解決できることを知ったから。猛勉強した。外来でストーマ保有者の人から、「海外旅行に行ってきた」「ゴルフしたいと文才表だ」と言われる。「そんなときに一緒に喜べるのが一番うれしいです」という。

（医療ジャーナリスト・福原麻祐）
（アスペクトライフのホームページに福原さんのコラムを掲載しています）

患者を 支える人々

① スムーズな治験へ 病院内を調整 ② 患者から話せる環境作りに配慮



臨床研究コーディネーター

やまぎわ ゆみこ
山際 有美子さん

「臨床研究」とは、病気の予防法、診断法、治療法について、人を対象に研究することだ。その一つが臨床試験で、薬の安全性や有効性、副作用などを評価するためにデータを集める。特に、新薬や既存薬の新たな効果について厚生労働省から承認を得るための試験は「治験」と呼ばれる。

臨床研究コーディネーター
(CRC=Clinical Research

Coordinator)は、それら臨床試験の開始から終了までスムーズに進むように、病院内の関連部署との調整や患者のサポートを担当する。日本では98年に新設された。

四国がんセンター治験・臨床試験管理室副主任の山際有美子さん(40)はCRCになって6年目。以前は薬剤師の業務をしていた。消化器内科と乳腺外科で、術後補助療法も進行・再発時に扱う7種類の抗がん剤の治験を受け持つ。

治験の情報は病院にポスターが掲示されたり、新聞広告やインターネットで募集されたりする。

69年生まれ。済生会松山病院勤務を経て、01年から四国がんセンターへ。04年から現職。08年がん薬物療法認定

薬剤師を、09年日本臨床薬理学会認定CRCを、それぞれ取得。趣味はケー

る。症状を考慮しながら医師が勧めることもある。治験の参加には、新しい治療法の選択肢が加わるといふメリットだけでなく、未知の副作用出現の恐れというデメリットも考えられる。このため、倫理的な配慮として、患者自身がその必要性を認めなければ断ることも、途中で参加を取りやめることもできる。

「CRCは患者の代弁者としての役割も担うので、山際さんは「治験についてどう思っているか、症状は出ていないか」など、患者から話してもらえるように、いつも気を使っています。治験に対して「病院のモルモット(実験材料)にイメージする人もいます。松山市内に住む乳がんの女性(44)もそうだった。だが、説明を聞いて誤解と思いい、治験に参加した。2年半になる。CRCのことは「病院内の信頼できるパートナー」と表現しよう。」

「治験で体に痛みやだるさが出たときや不安なとき、山際さんに話すときよく聞いてくれ、私の気持ちもわかってくれた。それが治験への安心につながり、心も癒やされます。」

山際さんは仕事のやりがいについて、「多くの人に役立つ薬が市場に出る過程に携わっていること、そして、そのなかで患者さんに向き合えることです」と話している。(医療ジャーナリスト・福原麻希)

(アスパラクラブのホームページに福原さんのコラムを掲載しています)